

槐

かい

岡井省二創刊

平成30年10月号

平成三十年十月一日発行 第二十八巻第十号 通巻第三二八号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



大出水

高橋将夫

風鈴の音に合はせて風きたる
古伊万里と早桃のやうな二人かな
深遠の闇に快^け楽^{らく}の泉湧く
すれ違ふ人が気になる木下闇

大蟻の一個師団や兵の墓
母長寿夏大根のおろし蕎麦
震災に追打ち梅雨の大出水
一村の歴史呑み込む大出水
秩序とは崩れゆくもの大出水
夕風の中に充実感はあり
雲海を容るる広さのある心



槐安集

水野恒彦

我もまた太虚の下のかたつむり
沈思せよ黙考せよと墓
蛇の衣まだ魂の匂ひあり
蜉蝣や忘却の光放しつづ
生も死も一瞬のこと紙魚走る

加藤みき

どの雲も根ざしてゐたり日傘
ポンポンダリアこの陽光を好みたり
一服の足先にある赤まんま
馬鈴薯はわれのビタミンCのもと
田の色や日ざしまだまだ厳しうて

中島陽華

夏つばめ茶つきり節が風に乗る
揺るるたび腰笑ふなり滝見橋
四阿に作藏のこ糸水無月会
天籟の東屋に汲む新茶かな
言霊や淵の色なる濃紫陽花

竹内悦子

足の甲火傷してをる半夏かな
風穴や羊蹄の花海を向き
鱒答へて川端柳揺れてをり
句碑の空夏鶯と不如帰
忘草書棚の本の犬の耳



雨村敏子

夏安居や那智黒石に雨しきり
七月の蓮田に近くゐたりけり
なほ近くわが晩節の夏の海
地も人もわらわら生きて酷暑なる
墨磨るや一直線に夏木賊

本多俊子

雲の峰崩れて龍の貌となる
言霊の水輪流るる太宰の忌
少年の夢無限なり峰の雲
ダンスなどいかががでしよか天使魚
八月や胸の奥処といふことば

近藤喜子

遠泳や海の扉を押し開けつ
ふはと舞ひたし羅を翅にして
行く夏や刻さらさらと砂時計
遠きほど思ひの深む花火かな
大空に清流ありぬ夜光蟲

瀬川公馨

六道の辻に立ちけり梅雨の斎
無数に落つる揚梅の虚心かな
汜濫の刻一刻の地獄絵図
願人坊主行けども行けども美中紅
盛り場に喜捨してゐたりビール缶

柳川 晋

雲の峰巒は光のすぐそばに
片蔭やひよつこり出たり入つたり
炎帝が雲を完食したる空
鳴神や崇り知らぬが仏にて
虹立つや地球もともと軽きもの

熊川 暁子

水郷の町に来てをり風鈴屋
少年の家族となりし兜虫
花火にも主張のありて空焦がす
夏木立人のみ込んでほき出して
火の性を青く燃やして熱帯魚

寺田 すぐ江

青芒風の形に吹かれぬる
入道雲赤い魚を釣り落とす
茜雲蜻蛉は海の色を曳く
反抗期大きく曲る胡瓜かな
夕星に生気みなぎる百日紅

岩下 芳子

芸術品てふ蘭鑄に長き糞
天井にはえとり蜘蛛の瞑想す
蜘蛛の囿の破れ繕ふ蜘蛛のゐる
南北を筋と呼ぶ街撒水車
しば漬の涼しき味を天塩皿

有松洋子

夏未明詩てふ果実のみづみづし
新しき風鈴へ風ぎこちなし
てんと虫指の温みを遊びをり
凌霄花大地の熱を色となす
たましひの欠片はありぬ水中花

岩月優美子

梅雨明やるんるんと朝の風
抛り所求めて鳴くや行々子
思考力ひねもす灼かれをりにけり
夏霞この重たきものは何
煩惱の濁水に咲く蓮の花

近藤紀子

芋の葉の露ころころと集めし日
昼顔の杭に巻きつく勢かな
街なかの音みな消ゆる炎暑なり
夏蓬わたり来る風匂ひけり
夏の杜 歡喜眼耳鼻舌身意

竹中一花

鬣に青葉のひかり牧の朝
大空や口をへの字の銚の稚児
鴨川に流るる囃子酷暑闇
天狗飛ぶ山の主や牛蛙
梅雨豪雨赤きつなぎの立ち向ふ

前田美恵子

暁ときや一村すでに夏の色
禁断の何食らひをる時鳥
緑陰を出ず終ひや嫁姑
干草の匂ひ残れる水飲場
一陣の風の行く手に水を打つ

中田禎子

アンチ・エイジングいきいきと水中花
年どしこの糸蘇る江戸風鈴
さそり座や項に残るかぶれ痕
炎昼に庭下駄消えてをりにける
閻魔をる酷暑の門をくぐりけり

吉田順子

七夕や銀河にながす我が心
風のきてふつと消えたる葛の花
神域やいきいきと咲く古代蓮
飛ぶものの胴のひかりや夏草刈る
点滅の点に螢のいのちかな



槐市集

犬塚李里子

現し世をひとひら舞ひ来夏落葉
十字架は雲の向かふよ新樹光
十葉や喜怒淡くなり年を経し
祭獅子人の息して祝儀食む
常世へと風と来て去る火焚鳥

井上静子

酷暑なる河馬の目ン玉動かざる
人生の機微いろいろの式部の実
師の教へ耳に残りし夏大根
牛蛙の波打つ喉のんどコーラスす
日曜日の走り中とび墓

今井充子

同窓の想い出語る夏の空
靴裏の南天の花くだけ米
末広の子孫の看取り星涼し
梅雨寒や長電話後の安堵かな
夏日影首にタオルを巻きにけり

岩田洋子

大雨にのつぺらぼうの蟻地獄
悪妻の弱音を聞くや猛暑なる
油照りの石畳なり人の影
緑蔭や居酒屋の賑はつてをる
風鈴やこの子ただ今失恋中



植木戴子

車前草の花や朝風なまぬるき
ゆるゆると海馬動きし大暑かな
白南風や橋の袂の束子買ふ
みづうみや夕日の沈む夏の山
刀剣を研いてをりし秋気かな

江島照美

人生に余りはないよ揚花火
異界へと誘うてゐる大夕焼
病葉もかけがへなきものとなり
アーケード屋根のすき間の梅雨晴間
父の背の甚平似合ふ丸みかな

大塚たきよ

大鯰暴れし後の雨滴かな
鮎の骨みごと抜かれし皿並ぶ
暫らくを見つめあうたる雨蛙
夕波や鷗の番の輪をかきぬ
牛蛙声響きける沼の底

岡田桃子

花柄の小物あれこれ梅雨の部屋
啓俣び集ふ白靴寄する波
加賀平野めざす鞍掛くらがけ山朝曇り啓山出雲
朝顔を数ふ少女のワンピース
箸遣ひ正しく下水へ芋虫を

柳橋繁子

水玉の手拭ひ額に光る汗
夕立をくぐりて洞ヶ峠かな
空腹に摘みし野苺峠越え
とけさうでとけぬ数独花氷
電線の影は五線譜日からかさ

山田佳子

花氷闇の中なる光かな
鮎を食ぶ一か所にある飾り塩
岩を打つ滝音木々のゆれてをり
野の花のことに似合ひし夏座敷
三伏や居間の時計の進みがち

槐集

高橋将夫選

サーファー立つ北齋ブルーの波頭
大阪 藤田美耶子

ブロンズの乙女の像に差す日傘

烈風にひるむことなし蜘蛛の糸

ピアノの音紋白蝶の生れにけり

ふうはりと空を手招く百日紅

明日あると思ふ心の水すまし

喜雨を得て行く方知れず蝸牛

代田いま空千枚を献上す

夏の池極楽浄土の彩に満ち

母の待つ浄土へ暑中見舞かな

ルビコンを渡りて今は避暑便り

荒くれし瀑布もいつか清流に

サルビアは血の色に咲く熱情も

色褪せしグローブ下げて俺の夏

人の世の無量光寺の七変化

空蟬に縛りを解きし母の顔
守口 三木 亨

美人とて表皮一枚鱧の皮

生き方に曇りなく蟻は駆足

夕風にナイフ入れれば中はレア

風死して象と木星みつめ合ふ

猛暑には抗ひもせず蟄居せり
芦屋 田中 信行

要介護3母に手渡すシューアイス

平成の名残りの滴梅雨明けぬ

大事成し龍馬の宿に草雲雀

八咫烏白夜の国を翔けて行け

新涼や指揮棒より出づウインの森
枚方 高野 昌代

朱夏たるや干され消ゆるか我が身命

向日葵や不屈の精神真似がたく

巴里祭やモノラル盤の針を置く

鎮魂の月復興の月今のぼる

銀河往來

◆槐集観照

サーファー立つ北斎ブルーの波頭 藤田美耶子
北斎ブルーの波頭があざやかに目に浮かぶ。

〈烈風にひるむことなし蜘蛛の糸〉の句 烈風にもひるまな
い蜘蛛の糸の心意気に感じた。

〈ピアノの音紋白蝶の生れにけり〉の句、まるで音譜も空中
を舞っているようだ。

〈ふうわりと空を手招く百日紅〉の句、「空を手招く」の発想
がよい。「ふうわり」が効いている。

以上、どの句も感性が豊かで、読者を楽しませてくれる。

明日あると思ふ心の水すまし 平野 多聞
明日もまた今日のように幸せな一日が来ると思えば、心がか
るやかになる。「水すまし」の語感が爽やかさ呼ぶ。「明日あり
と思う心の徒桜」を逆手に取っているところが味噌。

〈代田いま空千枚を献上す〉の句、青空を映す千枚田は普通
だが、「献上す」が作者ならではの発想。

〈夏の池極楽浄土の彩に満ち〉と〈母の待つ浄土へ暑中見舞
かな〉は仏の多聞の署名入りの句。

ルビコンを渡りて今は避暑便り 江島 照美
ルビコンを渡るような一大決心をして何かをした。そして今
はおだやかに暑中見舞など書いている。この展開の妙に脱帽。
〈荒くれし瀑布もいつか清流に〉はこの本質を詠む。
〈サルビアは血の色に咲く熱情も〉とへ人の世の無量光寺の

七変化〉は作者の内心を窺わせる。

〈色褪せしグロップ下げて俺の夏は野球少年のノスタルジー
を思わせるが、お孫さんを見ての作だろう。

夕風にナイフ入れれば中はレア 三木 亨
レア、ミディアム、ウエルダンとくれば焼肉。夕風の状態で
レアを並べる発想はまさにこの作者ならではのもの。

〈美人とて表皮一枚鱧の皮〉の「美人とて表皮一枚」がシニ
カルで、「鱧の皮」が止めを刺している。

大事成し竜馬の宿に草雲雀 田中 信行
大事をなして、なお謙虚。作者は今、この草雲雀の心境なの
だろう。〈猛暑には抗ひもせず蟄居せり〉の句にも相通じるも
のを感じさせられる。

〈平成の名残の滴梅雨明けぬ〉〈八咫鳥白夜の国を翔けて行け〉
も秀句。

鎮魂の月復興の月今のぼる 高野 昌代
鎮魂と復興への思いが、月を通して痛切に伝わってくる。
〈新涼や指揮棒より出づウインの森〉の句、ウインの森の交
響楽が爽やかに聞こえてくる。

慕はしくまた恐ろしく葉鶏頭 久保 夢女
葉鶏頭の本質に迫る一句。
〈舟虫のゾロリゾロリと生きてゐる〉の句、舟虫の本質をユー
モラスに捉えている。